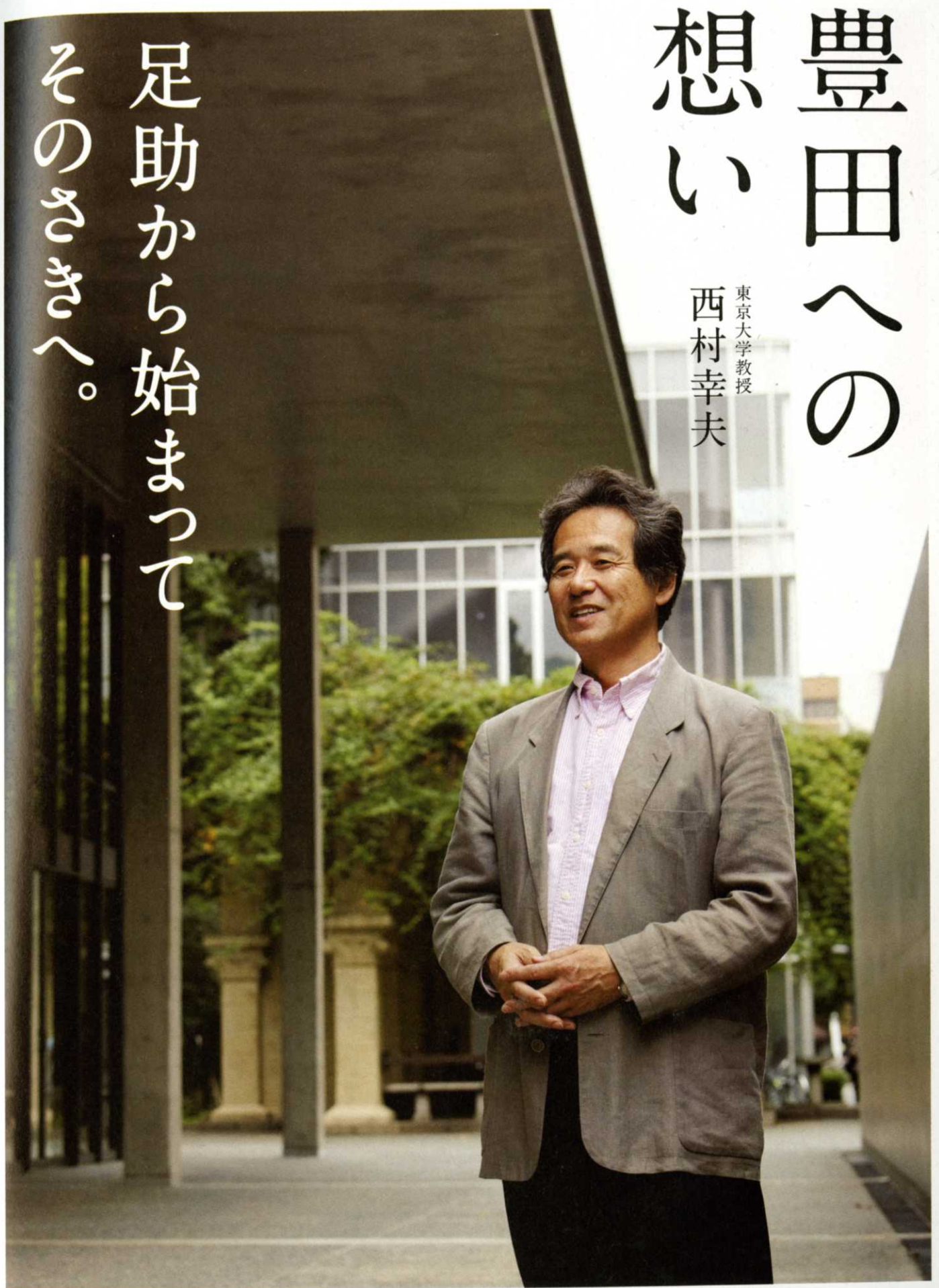


豊田への 想い

東京大学教授
西村幸夫



足助から始まって そのときまで

足助との出会い

私の豊田市との付き合いは足助から始まりました。初めて足助を訪れたのは昭和53年でした。この年に、足助で第1回の全国町並みゼミが開かれ、私はそこへ一学生として参加しました。当時大学院に入りたての23歳だったのを覚えています。

全国町並みゼミというのは、町並み保存連盟（後にNPO全国町並み保存連盟となる）が主催する年1回の総会で、この年に記念すべき第1回の大会が足助と有松（名古屋市緑区）で連携して開催されました。この催しは現在も続いています。これはおそらく足助で開催された初めての全国大会ではなかったでしょうか。

そのとき足助のまちを訪れた印象は、ゴミが一つも落ちていなくて、手入れの行き届いた通りと店構え、白と黒の重厚な町並みといったものでした。後で聞くと、全国からの訪問者のために入念に準備され、掃除も万端やられていたということです。その心根に頭が下がります。

もちろん当時から足助のまちは個性あるまちづくりを進めている自治体として名前が知られていました。その後三州足助屋敷のオープンに始まり、社会福祉施設と観光施設とをミックス

したユニークな施設である百年草の建設と運営、レストラン参州楼、夜桜ならぬ香風溪の「夜楓」のライトアップなど、実に先進的な取組を進めてこられ、今日に至っているのですが、どれもどちらかというと行政主導型で行われてきました。行政側に大きな構想力を持った人材がそろっていたからですが、このことは逆に言うと、行政側に力があつたために、行政側にとって実現しやすい事業は進められたのですが、例えば町並み景観の保全のように地域住民の合意がぜひとも必要な手間のかかる仕事はやや後回しになった感があるともいえます。といっても、何も手が付けられていないわけではなく、まちづくりのための議論は広く浸透しており、住民の皆さんの意識も議論のレベルも相当な水準であることはだれしも実感してきたところです。

その後、私はおそらく延べにするとかれこれ30回前後は足助に通つていようと思います。正確に数えたことはありませんが、もつと多いかもしれせん。ある時は足助の町並み保存運動の歴史資料をまとめるというところで、足助の町並みを守る会のお世話になって民間の助成をもらって取りまとめをしましたし、「歴史的環境整備街路事業（歴みち事業）」や「街並み環境整備事業（街環事業）」などといった当時の建設

省の事業に関連して、事業の中身を改善するための相談に乗るといったこともありました。また町の事業として行われていた住宅マスタープラン作成の一環として山ろく部に畑付き住宅を分譲するという夢のある企画に付き合ったり、逆に町並みの整備が通り一遍の民芸風になるのをどうしたら改善できるかという議論を町の皆さんとやってきたりもしました。

また、台湾から日本という文化庁長官にあたる文化建設委員会の主任委

員一行を案内して足助を訪れたこともありました。実は足助はまちづくりの実践地として台湾でも有名なのです。私はかつて『町並みまちづくり物語』（平成9年、古今書院）という本の中で足助のまちづくりを紹介したことがあるのですが、この本は出版されて間もなく台湾で翻訳され、『故郷魅力倶楽部』という名前前で1万2千部以上も売れたということも貢献しているかもしれません。この本は足助の書店にも置かれているので、ご覧になった人もおられるかもしれません。



西村幸夫さん

昭和27(1952)年、福岡市生まれ。東京大学都市工学科卒、同大学院修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、平成8(1996)年より東京大学教授。この間アジア工科大学助教授(バンコク)、MIT客員研究員、コロンビア大学客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授などを歴任。専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画など。工学博士。

